

個々の主体性を育むバスケットボールの授業

— チームビルディングの知識学習とGROWモデルを用いた学習活動を通して —

伊藤 翔子¹

これまでの筆者の「保健体育」の授業では、リーダー性に優れた生徒が中心となって話し合いやその他の活動が進むことが多く、個々の生徒に主体性を育むことができていなかった。そこで、本研究では、チームビルディングの知識学習により心理的安全性を確保するとともに、GROWモデルを用いた学習活動を行うことで、個々の主体性を育むことができると考え、検証授業を実施したところ、その有効性が明らかとなった。

はじめに

中央教育審議会『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」(以下、「答申」という)では、集団の中で個が埋没してしまうことがないように、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の必要性が述べられている(中央教育審議会 2021)。

また、『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説保健体育編』では、育成を目指す「学びに向かう力, 人間性等」の第3学年においては、各領域に自主的に取り組むこととし、これは、「義務教育の修了段階であることを踏まえ、各領域に自ら進んで取り組めるようにすることが大切であることを強調したものである」(文部科学省 2018)と示され、生徒の主体性の育成が求められている。

筆者の「保健体育」の授業の実践を振り返ると、チームでの活動においては、リーダー性に優れた生徒が主体性を発揮して、作戦や練習方法を積極的に提案しながらチームを牽引する姿がみられた。一方、他の生徒はその提案に頼ることが多く、自分で考えたり伝えたりせず、リーダーの意見を中心に話し合いやその他の活動が進むことがあった。これは、「答申」が指摘する「個が埋没」している状況であり、個々の生徒に主体性を育むことができていなかったことが要因であると考えられる。

角田は、主体性を育む教育について、「個性やそれぞれの意見を尊重することで、生徒が自己を肯定し、自信を持って自己表現することに繋がるだろう」(角田 2022)と指摘している。

チームでの活動について、堀は、機能的なチームをつくるための考え方や技術の集大成をチームビルディングとし、その有効性を述べている。また、チームビルディングは、チーム内の心理的安全性を確保することができ、それにより自分の能力や個性を発揮し、結果として高い成果を生み出すことができる(堀 2024 p. 158)と述べている。

一方、石田は、コーチングの目的を、相手が自身の中に

ある答えに気づき、目指す力を存分に発揮するようになることとし、コーチングアプローチとして広く知られているGROWモデルを用いた授業実践を行い、「モチベーションや、学習する深さや質、学習者の姿勢に正の影響が期待できるものとなっていた」(石田 2022 p. 146)ことを報告している。このことから、GROWモデルを活用することにより、個々の生徒が互いの意見や考えを尊重し合いながら学習することができる考えた。

以上のことから、チームビルディングに関する知識を学習すること(以下、「チームビルディングの知識学習」という)と、GROWモデルを用いた学習活動が、個々の主体性を育むことにつながると考え、本主題を設定した。

研究の目的

バスケットボール(球技ゴール型)の授業において、チームビルディングの知識学習により心理的安全性を確保するとともに、GROWモデルを用いた学習活動を行うことが、個々の主体性を育むために有効であるかを明らかにする。

研究の内容

1 理論の研究

(1) 個々の主体性を育むことについて

鈴木ら(2019)は、人の主体性を測る「主体性尺度」について、その基本構造を①自分で決めて(自己決定力)、②自分で考えて(方向づけ、知的的好奇心)、③自分で実行する(積極的な行動、自己表現力)と示している。

本研究では、この基本構造に基づき、生徒の主体性がある状況を表1のように設定する。

表1 本研究における生徒の主体性がある状況の設定

主体性尺度の基本構造	生徒の主体性がある状況
①自分で決めて(自己決定力)	自分で目標を決めることができる
②自分で考えて(方向づけ、知的的好奇心)	自分の現状を踏まえて、課題解決の方法を考えることができる
③自分で実行する(積極的な行動、自己表現力)	チーム内で自分の考えを伝えることができる

1 横須賀市立池上中学校 教諭

(2) チームビルディングの知識学習について

チームビルディングとは、チーム内のメンバー全員の技術面や精神面の連携を高める手法である。

梅垣ら(2016)は、チームビルディングに関する知識を構造的に理解できるようにするための「チームビルディング学習」を開発した。そして、それを中学校の「保健体育」の授業に取り入れた結果、生徒の集団的、協力的な関わり活動についての意識を向上させたと述べている。

チームビルディングには、チーム内の心理的安全性を高める効果もある。堀は、心理的安全性が確保されている状態を「『このチームなら何を言っても受け入れてくれる』という感覚をみんなが共有していること」(堀 2024 p. 158)と述べている。

また、長尾は、「どんなチームにも、発達するための段階がある」(長尾 2019 p. 104)と述べ、ブルース・W・タックマンが提唱した「タックマンモデル」をベースに、チームの発達段階を表2のような四つのステージにまとめている。そのうち、「フォーミングの壁を越えるには、心理的安全性が必要」(長尾 2019 p. 107)であると述べている。

表2 チームの発達段階(長尾 2019)

第1ステージ 【フォーミング】	チームが結成されたばかり。お互いのことも、何をするかもよくわかっていない。与えられた目標に向かって行動する。
第2ステージ 【ストーミング】	各メンバーの本音の意見が場に出る。対立や衝突が起こり、感情がモヤモヤする。パフォーマンスが低下する。
第3ステージ 【ノーマーキング】	情報共有が進んで役割とルールが明確になり、目的や目標を自分ごととして設定する。成果がはじまる。
第4ステージ 【トランスフォーミング】	あうんの呼吸で動けるようになる。チームがあたかも1つの生き物のように機能し、目覚ましい成果が生まれる。

これらのことから、本研究では、チームの発達段階に合わせたチームビルディングの知識学習により、チーム内の心理的安全性を確保すれば、各チームの発達段階がフォーミングからそれ以降に円滑に進展すると考えた。そして、各メンバーが思ったことや考えたことを素直に発言しやすくなることで、個々の役割や目標を自分事として設定しながら学習できるようにすることを目指した。

(3) GROWモデルについて

GROWモデルは、目標達成へと導くコーチングの手法であり、そのプロセスのGoal (G: 目標設定)、Reality (R: 現状把握)、Options (O: 選択肢の創出)、Will (W: 意思決定)の頭文字をとって「GROWモデル」と呼ばれている。

石田は、学生が目標設定の能力を身に付けると、自分事と捉えて物事にあたるとし、GROWモデルの過程を落とし込んだワークシートを使用した授業実践において、「学習意識・モチベーションが下がりにくく、学習する深さや質に影響を受けていた」(石田 2022 p. 146)ことを明らかにしている。また、佐藤(2011)は、GROWモデルを一斉指導で用いる際には、生徒同士の運動観察や学習カードを取り入れることの有効性を示唆している。

これらのことから、本研究の学習指導計画に反映させ、生徒同士で互いにコーチングが行えるように工夫をした。

2 研究の仮説

中学校第3学年のバスケットボール(球技ゴール型)の授業において、チームビルディングの知識学習により心理的安全性を確保するとともに、GROWモデルを用いた学習活動を行うことにより、個々の主体性を育むことができるであろう。

3 検証の視点

仮説に基づいて、次の検証の視点を設定した。

- (1) チームビルディングの知識学習の成果はどうか
- (2) GROWモデルを用いた学習活動の成果はどうか
- (3) 個々の主体性を育むことができたか

4 検証授業

(1) 概要

【期間】令和6年10月1日(火)～10月29日(火)

【対象】横須賀市立池上中学校
第3学年2学級(62名)

【教科】「保健体育」

【単元名】球技: ゴール型「バスケットボール」

【時数】10時間

【授業者】伊藤 翔子(筆者)

(2) 単元の概要(表3参照)

表3 単元の概要

時間	学習のねらい	学習活動	チームの発達階
1	エリアを意思決定する 目指すチームの姿と 自己がプレイをしたい	○オリエンテーション ○チームビルディングの知識学習① ・チームの特徴 ○GROWモデルを用いた学習活動① 【G】 目指すチームのプレイスタイルの設定 【R】 セットシュートの練習での現状把握 【R】 試しのゲーム(3×2)での現状把握 ○チーム会議	フォーミング
2			
3	その練習方法を意思決定する 自己が発揮したいプレイと	○チームビルディングの知識学習② ・チームへの愛情 ・コミュニケーション ○GROWモデルを用いた学習活動② 【G】 自己が発揮したいプレイの設定 【O】 練習方法の選択 【R】 ゲームI(3×2)での現状把握 ○チーム会議	ストーミング
4			
5			
6	決定する チームで発揮したい連携プレイとその練習方法を意思決定する	○チームビルディングの知識学習③ ・リーダーシップとフォロワーシップ ・メンバー同士の理解と助け合い ・チームワークの要素 ○GROWモデルを用いた学習活動③ 【G】 チームで発揮したい連携プレイの設定 連携プレイで自己が担担するプレイの設定 【O】 練習方法の選択 【R】 ゲームII(3×3)での現状把握 ○チーム会議	ノーマーキング
7			
8			
9	学習の成果を発揮して、リーグ戦に取り組み	○GROWモデルを用いた学習活動④ 【G】 チームで発揮したい連携プレイの設定 連携プレイで自己が担担するプレイの設定 【O】 練習方法の選択 【R】 リーグ戦(3×3)での現状把握 ○チーム会議	ノーマーキング
10			

(3) 学習指導の工夫

ア チームビルディングの知識学習

単元の冒頭では、チームの発達段階では、第1ステージのフォーミングであることが考えられる。本研究では、各チームが、単元の終盤には第3ステージのノーマリングに達することを目指し、想定されるチームの発達段階に応じて、心理的安全性を高めることができるよう、表3のようなチームビルディングの知識学習を設定した。

イ GROWモデルを用いた学習活動

仲間同士でコーチングをするGROWモデルが行えるよう、本研究では、毎時間の授業において、「G：目標設定」「R：現状把握」「O：選択肢の創出」のプロセスを設定するとともに、生徒がそれぞれのプロセスに「W：意思決定」して取り組むようにする。GROWモデルで取り組む内容は、想定されるチームの発達段階を踏まえて表3のように設定した。また、その際は、「W：意思決定」を可視化し、仲間同士でコーチングをしたり、チーム会議をしたりするときに自分の考えが伝えられるように、学習カードを活用するとともに、仲間同士の運動観察をする時間を設定した。

ウ ゲームの工夫

本研究では、表3のとおり、ゲームをGROWモデルの「R：現状把握」のプロセスに位置付けている。そのため、毎時間のゲームに「G：目標設定」としたプレイが積極的に行われるよう、次のようなゲームの工夫をした。

(7) コートの工夫

GROWモデルのプロセスを実現しやすくするために、ゲームはハーフコートで行うこととした。

また、コート内は図1のようにインサイド、ミドルレンジ、アウトサイドの三つのエリアを示し、「G：目標設定」を踏まえて、ゴールや守備者との位置から、自分はどのエリアを主としたプレイをしたいのか「O：選択肢の創出」となるようにした。

(イ) 得点の工夫

図1のように、得点はインサイド及びミドルレンジからのゴールは2点、アウトサイドからは3点とすることで、攻守ともにプレイがインサイド及びミドルレンジに固定されないようにした。また、すべてのエリアから、シュートはゴールに入らなくてもリングに当たったら1点とすることで、シュートを「G：目標設定」とした場合、積極的にチャレンジできるようにした。



図1 コート図

(ウ) 人数の工夫

単元前半（1～5時間目）は、「G：目標設定」とした「チームのプレイスタイル」や「自己が発揮したいプレイ」

がゲーム中に表出しやすくなるよう、攻撃側を数的優位にした3対2のゲームを行った。

一方、単元後半（6～10時間目）は、「G：目標設定」とした「チームで発揮したい連携プレイ」や「連携プレイで自己が分担するプレイ」をゲーム中に発揮する必要が生じるよう、攻撃側の数的優位をなくし、3対3のゲームを行った。

(エ) 記録の工夫

チームの記録カードを用いて、毎時間、ゲーム中のシュート回数や位置などを記録するとともに、動画で撮影した。記録と動画を用いてゲームを振り返ることで、自己やチームの「R：現状把握」を行いやすくし、「G：目標設定」や「O：選択肢の創出」の検討及び再設定をしやすくした。

5 検証授業の結果と考察

集計・分析にあたり、データの合計割合が100%にならない場合がある。

(1) チームビルディングの知識学習の成果はどうか

ア チーム内の心理的安全性が確保できたか

チーム内の心理的安全性の確保については、授業の事前・事後アンケートの「自己の発言がメンバーに受け入れられていると感じたか」の回答により検証した。

図2のように、「そう思う」が事前では43%であったものが、事後では83%と40ポイント増加し、全ての生徒が肯定的な回答をしたことから、今回の授業では、チーム内の心理的安全性は確保することができたと考えられる。

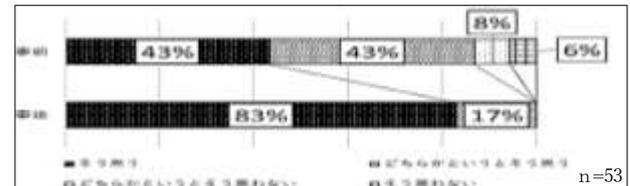


図2 自己の発言がメンバーに受け入れられていると感じたか

イ チームの発達段階の進展が見られたか

チームの発達段階の進展について検証するために、小松崎らが作成した「仲間づくり調査票」（小松崎他 2003）の因子のうち、表4に示した項目について、2～10時間目に、学習カードで、生徒に質問紙調査を行った。その結果から形成的評価を行った。

表4 「仲間づくり調査票」を基に本研究で実施した質問項目

因子	項目
集団的相互作用	あなたは、チームのメンバーをほめたり、励ましたりしましたか
集団的活動への意欲	あなたは、今日取り組んだ運動をメンバー全員で楽しむことができましたか
集団的人間関係	あなたは、チームがひとつになったように感じましたか
集団的達成	あなたは、チームのみんなで成し遂げたという満足感を味わうことができましたか

図3は、各項目の回答の「はい」は3点、「どちらでもない」は2点、「いいえ」は1点として算出し、毎時間の平均点を推移で示したものである。

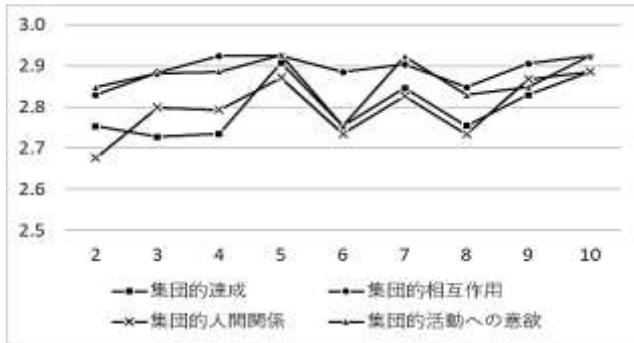


図3 メンバーの関係性について

今回の授業では、4因子の全ての項目で、「仲間づくり調査票」において、授業成果の目安とされる2.5ポイント以上の高い数値が得られた。5時間目に一度、集団的人間関係と集団的達成の因子に関する項目が大きく上昇した。これは、それまでにチームビルディングの知識学習で学んだことに加え、5時間目の学習が、自己が発揮したいプレイを「G：目標設定」とする最終時間であったため、個々が目標に向かって行動できたことが、集団的人間関係と集団的達成の向上につながったものと考えられ、チームの発達段階は、フォーミングの末期からストーミングの初期にあったと推察する。

6時間目に、集団的相互作用以外の因子に関する項目の数値が大きく低下し、7～9時間目にかけて上下した。これは、6時間目からの学習のねらいが、自己が発揮したいプレイから、チームで発揮したい連携プレイと自分が分担する連携プレイに変わったことから、チーム内の対立や衝突、感情のモヤモヤ、パフォーマンスの低下などが出現するなどのチームの発達段階におけるストーミングの特徴が現れたと推察する。

表5は、単元終了時のチームビルディングについての振り返りで、生徒が記述したものの一部である。個々の役割が明確になり、チームの目標と個々の目標が関連付き、成果が出始めた状況が記されており、チームの発達段階が、ノーミングに達したことが推察される。

表5 チームビルディングについての振り返りの記述 (原文ママ、下線は筆者)

生徒A	その人の強みを発揮するために、ポジションなどを決めて試合をするなどがあった
生徒B	それぞれチームメイトの得意なことを最大限に発揮できるチームづくりができたと思う。それぞれの武器をいかして戦術を練って、メンバー構成を考えることができた。
生徒C	得意な人も苦手な人もチームのプレイにどう貢献するか考えたり、自分の良い部分を活かしてプレイをしたりと、チームに意見を出せたり、それを受け入れる、話しかけやすい環境があったと思った。

ア及びイから、チームの発達段階に合わせたチームビルディングの知識学習の成果として、チーム内の心理的安全性が確保されたこと、チームの発達段階がノーミングからストーミング、フォーミングへ進展したことが考

えられる。

(2) GROWモデルを用いた学習活動の成果はどうであったか

ア 「G：目標設定」ができたか

図4は、「G：目標設定」を「チームのプレイスタイル」とした2時間目と、「自己が発揮したいプレイ」とした3～5時間目に、「自己の目標を自分で決めることができたか」について、学習カードの振り返りで、生徒が5段階で自己評価した結果である。

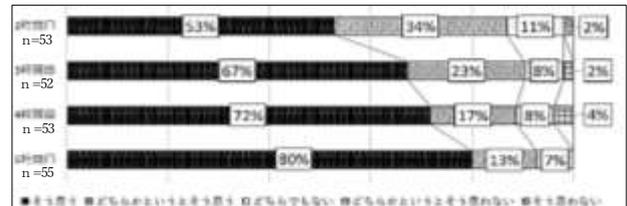


図4 自己のプレイの目標を決めることができたか

2時間目から5時間目にかけて、「そう思う」と回答した生徒は、53%から80%と27ポイント増加した。

毎時間の学習カードに自己が発揮することを目指す姿「G：目標設定」を記述する欄を設け、授業のはじめに書く時間を確保したことで、授業を重ねる毎にスムーズに目標を決めることができるようになった。

イ 「R：現状把握」ができたか

図5は、「プレイの現状把握ができたか」について2～10時間目に、学習カードの振り返りで、生徒が5段階で自己評価した結果である。

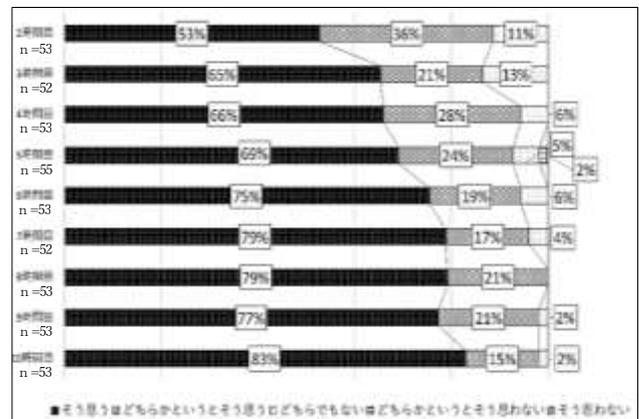


図5 プレイの現状把握ができたか

「そう思う」と回答した生徒が2時間目は53%だったのが、10時間目には83%に増加した。単元を通して徐々に肯定的な回答の割合が増加した。その理由として、チームによる連携プレイの中で、個人が担う役割を持ったことで、「R：現状把握」の手掛かりが増えたことや、各メンバーの状況についてチーム会議で共有するため、他者との対話の場面が増えたことが、「R：現状把握」がしやすくなった要因であると考えられる。

ウ 「O：選択肢の創出」ができたか

図6は、「課題解決の方法を自分で決めることができたか」について、2～10時間目に、学習カードの振り返りで、生徒が5段階で自己評価した結果である。

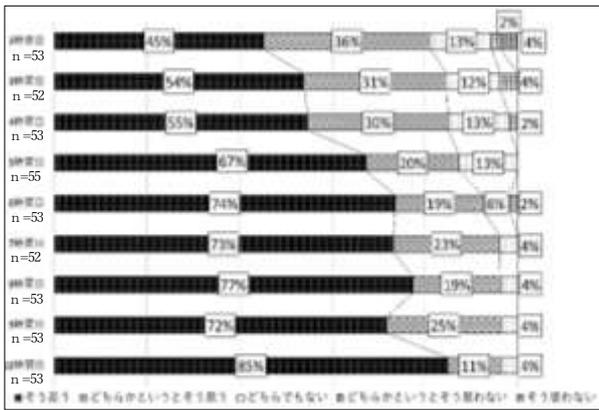


図6 課題解決の方法を自分で決めることができたか

5時間目以降に「そう思う」の回答が大きく増加したこと、7時間目に肯定的な回答が最大となり以降は維持すること、10時間目に「そう思う」の回答が最大値になったことの3点に着目する。

5時間目は、「自己が発揮したいプレイ」を「G：目標設定」とした最終時間である。目標に応じて「O：選択肢の創出」とした練習方法の中から自分で考え「W：意思決定」できたことから、「そう思う」と強く感じる事ができたと考えられる。7時間目は、5時間目に「チームで発揮したい連携プレイ」を「G：目標設定」してから2時間目に当たる時間である。「チームで発揮したい連携プレイ」をできるようにするための練習方法を、「O：選択肢の創出」の中から自分で考え、「W：意思決定」ができたと感じることができたものとする。10時間目は、単元の最終時間で、最後のリーグ戦に向けた練習方法を、これまでの学習成果を発揮して、改めて、「O：選択肢の創出」の中から自分で練習方法を考え、「W：意思決定」ができたことと推察される。

ア、イ及びウから、単元を通してGROWモデルにより「W：意思決定」を行ってきたことで、課題解決の方法を自分で考え、決めることができたと感じた生徒が徐々に増え、単元後半には、96%の生徒が肯定的な回答を示すことにつながり、主体的な学習ができていたと考えられる。

(3) 個々の主体性を育むことができたか

「本研究における生徒の主体性がある状況の設定」(表1)に基づき、①自分で決めて②自分で考えて③自分で実行することができていたかについて検証した。

ア 自分で目標を決めることができたか

先述の図4で示したように、「自己の目標を自分で決めることができたか」については、時数を重ねる毎に肯定的な回答の割合が増加した。また、単元終了の10時間目には、全ての生徒が学習カードに目標を記入することができた。このことから、単元を通して目標を自分で決めて書く活動を行ったことで、生徒が主体的に目標を決めることができるようになったと推察する。

イ 自分の現状を踏まえて、課題解決の方法を考えることができたか

「自分の現状を踏まえて、課題解決の方法を考えるこ

とができたか」を検証するため、「自己のプレイの課題を見付けることができたか」(図7)と、「自己のプレイの課題を解決するための方法を考えることができたか」(図8)のそれぞれについて事前・事後アンケートで質問した。

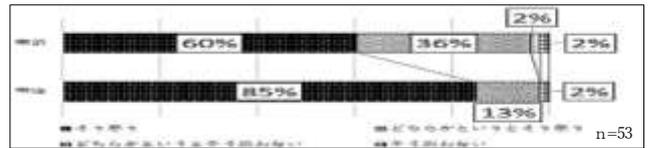


図7 自己のプレイの課題を見付けることができたか

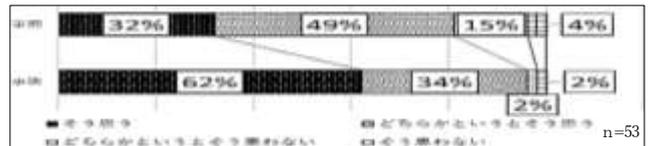


図8 自己のプレイの課題を解決するための方法を考えることができたか

図7において、「そう思う」が、事前では60%であったものが、事後では85%と25ポイント増加し、98%の生徒が肯定的な回答を示した。このことから、生徒は、自己の課題を見付けることができていたと考えられる。

また、図8において、「そう思う」が、事前では32%であったものが、事後では62%と30ポイント増加し、96%の生徒が肯定的な回答を示した。このことから、生徒は、自分の現状を踏まえて、課題解決の方法を考えていくことができていたと考えられる。

さらに、表6は、図8において、否定的な回答から肯定的な回答へ変容した2名の生徒の記述である。2名の記述には、GROWモデルのプロセスに沿って学習できていた様子がみられ、自己の現状を踏まえて課題解決の方法を考えることに効果的であったと推察する。

表6 GROWモデルを用いた学習の生徒の記述(原文ママ)

生徒D	最初に目標を決めることで、自分の現状やそれをできるようにする練習方法を考えやすくてよかった
生徒E	目標を立てて、それに合った練習を考えられてよかった

ウ チーム内で自己の考えを伝えることができたか

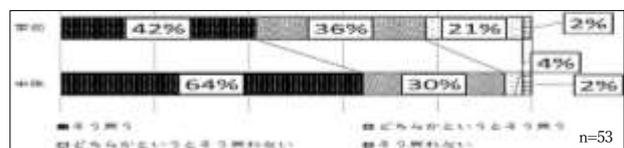


図9 自己の思ったことや、考えたことを伝えることができたか

図9は、事前・事後アンケートにおいて、「自己の思ったことや、考えたことを伝えることができたか」という質問の回答を示したものである。「そう思う」が、事前では42%であったものが、事後では64%と22ポイント増加し、94%の生徒が肯定的な回答をした。このことから、生徒はおおむね、チーム内で自分の考えを伝えることができていたと考える。

また、表7は、否定的な回答から肯定的な回答へ変容した1名の生徒の記述である。

表7 自己の取り組み方で変わったと思うことの生徒の記述(原文ママ、下線は筆者)

生徒F	今まではバスケットはシュートがうまい人に任せたり、意見があってもあまり言えないことが多かったけど、今回はチームに話しやすい雰囲気があって、積極的なプレイをすると褒め合ったりできたから、積極的にシュートしたり、作戦もよく理解できた。
-----	---

この記述からも、チームビルディングの知識学習により心理的安全性が確保され、自己の考えを伝えやすくなったことが推察される。

以上のことから、今回の授業実践で、チームビルディングの知識学習により心理的安全性を確保し、GROWモデルを用いた学習活動により主体的な学習を行えるようにしたことで個々の主体性を育むことができたと考える。

研究のまとめ

1 研究の成果

本研究において、チームビルディングの知識学習は、「保健体育」の授業におけるチームづくりにおいて、心理的安全性を確保するために有効であった。また、GROWモデルを用いた学習活動は、生徒が「G:目標設定」、「R:現状把握」、「O:選択肢の創出」のプロセスの中で、生徒自ら「W:意思決定」することになるため、主体的に学習を進めることができるようになった。

これらのことにより、①「自分で決めて」、②「自分で考えて」、③「自分で実行する」という主体性を育む授業実践ができたと考える。

本研究におけるチームビルディングの知識学習とGROWモデルを用いた学習活動の二つの手立ては、どちらも個々の主体性を育むためには不可欠であったと考える。

そして、個々の生徒が、主体性を発揮しながら学習に取り組むことで、チーム内での対話や活動がより活発なものとなった。メンバーの意見を取り入れ、自分の考えを発展させていく姿や、メンバーと協力しながら活動に取り組む姿は、正に、「答申」にも示されている「協働的な学び」の充実を図ることにもつながったと考える。

2 研究の課題

本研究において、生徒に身に付けさせたい資質・能力とその手立てとしたことは、体育分野の全ての領域で取り扱うことができる内容と方法であり、3年間で系統的に学べるように計画することが望ましいと考える。この点は教科として取り組むべき今後の課題として追究したい。

おわりに

本研究を行うにあたり、御協力いただいた、横須賀市立池上中学校の教職員の皆様、研究に関わった全ての皆様方に深く感謝申し上げ、結びとする。

2 指導主事 3 指導担当主事 4 教育指導員

[指導担当者]

加賀谷 光² 本田 拓己³ 西塚 祐一⁴

引用文献

- 中央教育審議会 2021 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」 p.18
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf (2024年12月20日取得)
- 文部科学省 2018 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説保健体育編』 東山書房 p.39
- 石田正寿・佐藤臨太郎 2022 「コーチングの理論と高校授業での実践」(奈良教育大学次世代教員養成センター『次世代教員養成センター研究紀要』第8号)
<https://nara-edu.repo.nii.ac.jp/records/13589> (2024年12月20日取得)
- 梅垣明美・大友智・南島永衣子・上田憲嗣・深田直宏・吉井健人・宮尾夏姫 2016 「中学生の体育授業を対象としたチームビルディング学習の開発とその有効性の検討」(日本体育科教育学会『体育科教育学研究』) p.16
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsppe/32/2/32_1/_pdf (2024年12月20日取得)
- 角田みなみ 2022 「『主体性』を育む教育とは」 p.7
<https://www.dlri.co.jp/files/ld/214496.pdf> (2024年12月20日取得)
- 小松崎敏・高橋健夫 2003 「仲間づくりの成果を評価する」高橋健夫編『体育授業を観察評価する』 明和出版 pp.16-19
- 佐藤知穂 2011 「『わかる』と『できる』の統一を目指した授業の実践—コーチングを活用した保健体育科の実践—」 p.251
<https://yamagata.repo.nii.ac.jp/records/1814> (2024年12月20日取得)
- 鈴木賢男・岡田斉 2019 「大学生の学業生活における満足と主体性との関連性の検討—発達を考慮した主体性尺度の必要性を探る—」(文教大学人間科学部『人間科学研究』第41号) p.171
<https://bunkyo.repo.nii.ac.jp/records/7677> (2024年12月20日取得)
- 長尾彰 2019 「宇宙兄弟今いる仲間であまくいくチームの話」 学研 pp.104-107
- 堀公俊 2024 「チームビルディング 人と人を『つなぐ』技法」 日本経済新聞出版

本研究の詳細は、神奈川県立総合教育センターのウェブサイト(体育指導センターのページ)を御覧ください。